2011年 新春対談

テーマ

「次代を担う子どもを育むまちづくり（スポーツ版）」

〔出席者〕 山田 朝生
スポーツ少年団「全羽曳野監督」

河田 彰
羽曳野市少年軟式野球連盟会長

ダルビッシュセファット　ファルサ
ダルビッシュ有投手の父

北川 嗣雄
羽曳野市長

松井 康夫
羽曳野市議会議長

（北川市長）

「子ども達に夢を」をテーマに新春対談を考えさせていただいてたところ、タイミングよく報知新聞社から、ダルビッシュ有投手がゴールデンスピリット賞を受賞されることになったと連絡が入り、「地元の市長として受賞式に出席をしていただきたい」との申し入れがあり、対談に花を添えることができました。本日は、皆さんよろしくお願いします。

（松井議長）

ダルビッシュ有投手の受賞は私の最大の夢をあきらめずに追いかけて行きたいという励みになりました。夢は出身である駒ヶ谷に「フリースクール」を開校することです。この地域の特性はみどりが豊富なところです。その特性を障がい者やひきこもり・不登校などいろいろな問題を抱えている方々に気軽に参加いただける場所として提供していきたい。このような、私の夢をお話させていただいたのは、今日聞かせていただける話で、私の夢が一歩でも実現に向けて近づくのではという期待も持っております。

（山田監督）

有にプロ野球チームに入団する前に、「グラウンドを一生懸命に世話してくれている人などに敬意を忘れないように」と言いました。そして、この受賞は人間性が伴ったものであり最高にうれしく思ってます。子どもの頃、父親とイランなどに行ったとき、日本と比べて貧しい地域をたくさん知っていることも、受賞に関係するのではないでしょうか。社会貢献で賞を受賞したことが、野球で成功したことよりも、本当にうれしく、有を誇りに思っております。

（河田会長）

小学５年生のときの有の話を思い出しました。彼もいろいろ小学生なりに悩んでいた頃があり、野球に対しての想いが積極的ではなかった時期がありました。ご両親に「小学校の子どもは野球だけではなく、いろいろ楽しいことに目を奪われますから」など、そんな話をしていました。結局「チームメイトと最後までつづけていく」という結論がでました。有には休んでもいいから、最後まで続けるようにと。ところが、有は中学に進学し「全羽曳野」へ入りますと話してくれたときはびっくりさせられました。それがすごくうれしかったですね。このように最後まで続けれたことに自信をつけたのが、野球に対する想いを引っ張り出せたのかなと思っています。

（ファルサ氏）

私はサッカーで長い間汗を流してきました。プロ選手になることが難しいのは自分自身、体で理解しています。また、プロ野球選手になる確率は有名一流大学に合格するよりも難しいですから、有にプロ野球選手を意識させて野球を始めさせたりはしていません。遠い先よりも目の前の目標を一つ一つクリアしていく、大きな目標を持っているよりも、明日の練習にしっかり参加できるようにと、そういった気持ちで責任をもって取り組みなさいとよく有に話しました。

（北川市長）

ダルビッシュ有投手が生まれ育った羽曳野では、どのような少年野球チームがあり、どのような環境で、どのような指導が行なわれているのか、あるいは家族の思いや指導者コーチ論と、いろいろな思いをお話しください。

（河田会長）

羽曳野市少年軟式野球連盟は小学１年生から６年生までが登録しています。この組織も 2011 年で 33 年目を迎えます。我々が指導した小学生がすでにコーチとしてチームの指導にあたっており、３世代が関わりあっている歴史ある少年野球です。まるで生まれた場所に産卵に戻る「鮭」のように、「小学生が大人になり結婚し、さらに子どもが産まれ、また羽曳野に住み、あたりまえのようにチームの指導に参加するような、魅力ある組織としていつまでも存続できるよう、スポーツの歴史伝統文化を何世代にもまたいで継承していきたいです。昔、自分自身が野球を楽しんでいた親しみのあるグラウンドで、小学生に成長した自分の子どもが野球を楽しんでいる。不思議であるが自然と親子の強いつながりができてくるみたいですね。私自身の子どもも同じように軟式野球に関わり、スポーツを通じた親子のつながりも大きかったと思います。

（松井議長）

私は中学時代、陸上部の中距離と長距離の選手でした。市内には誉田中学校と高鷲中学校の２校しかなく、南河内でも合わせて６～７校の参加しかないような時代だったと記憶しております。それでもトラック競技や駅伝大会と出場し、賞を頂くこともあれば、チームに迷惑をかけた事もありました。今でも良い思い出として大切にしています。高校へ進学して陸上を続けるも、高校２年生で身体的理由により挫折してしまいました。その挫折がコンプレックスになりました。しかし、負の連鎖だけで終わらず、コンプレックスをばねにしたりして、自分なりに気持ちをコントロールし、改善できたように記憶しています。皆様は指導者として携わり、多くの挫折などの事例があるかと思います。ダルビッシュ有投手のようにアスリートになれる確立は低いですが、スポーツを継続することで強くて優しいハートがもてるのではないかと信じております。また、スポーツは子育てにとって欠かせないポイントであり、大人として子どもを見守りながらじっくりと指導していくことが重要だと考えています。

（山田監督）

入団した子どものご両親に常に、「昨今、いろいろな事件や問題がある中、私たちは子どもたちからスポーツを通して、素晴らしい感動などを与えてもらっています。幸せですよ。」とお話させていただいてます。ところが、子どもに中学３年間野球を続けられることを、親や指導者に対して、感謝しなさいと、言ったところで理解はなかなかできません。指導者にも私は伝えていますが、子どもたちを長期スパン（３年間かけて）でみてほしいと。指導者が練習メニューを組み、その内容が各学年の成長過程に適合するように考えられていない場合は間違いであり、コーチの自己満足みたいなものであると指導者を怒ることがあります。全国から監督が集まる部会が発足され、その席でも、指導者の自己満足で子どもたちを教えてはならないと、私はよく言います。指導などの基本理念としては「入団したらやめないで３年間がんばる」という姿勢を貫くことです。そのような理念が「全羽曳野」が達成するべき責務である、全国制覇へつながっています。

（ファルサ氏）

私はアメリカへ進学してみたいという想いがありました。よって、高校からアメリカへ留学しました。松井議長から「挫折」というお話がありましたが、私も大学でクラブ活動をバリバリやっていた時期の話ですが、イランイラク戦争がありまして、444 事件（イランでアメリカの大使館関係者 50 数人を人質に、イランの学生が大使館を占拠した。ウィーン条約の規定に反したため、イラン政府は諸外国からの大きな非難を浴びることとなった。この事件発生から 444 日後に人質は解放された）が起こったときに、私も監督からレギュラーを外されてしまいました。その時にサッカーをやめるかやめないかという判断を求められました。このときに最終判断をだすきっかけはチームメイトの理解力でした。僕はサッカーを続けることができ、監督が変わったこともあり３回生のときにレギュラーに返り咲くことができました。そこで学んだのは自分で選んだ道を信じぬくことが大事だということでした。

（河田会長）

指導者の指導が重要であると痛感しております。指導者は高校や大学で経験した野球目線で子どもたちに指導を行なう傾向があります。スポ少軟式野球は小学１年生から６年生まで在籍しているので、指導方法は、よく考える必要があります。試合などで指導者が「昨日練習したやろ何でできへんねや！」とよくベンチから怒鳴っています。私は「それはちがうやろ」といつも思っています。すなわち指導とはどうあるべきか、指導者が考えなければなりません。一生懸命教えることが指導のひとつであっても悪くはありませんが、やっぱり、本当の意味での指導というのは、子どもが理解でき、子どもがそのプレーを試合でやり遂げたときに、初めて指導できたなと実感していただきたい。それが成長に繋がっていくと考えてます。一度の指導でうまくいく場合もありますが、二度同じことを指導してもうまくいかない場合もあります。小学生時代というのはそういうことの繰り返しであり、何回も粘り強く指導することが指導者として重要な部分だと感じています。

（ファルサ氏）

「昨日練習したやろ何でできへんねや！」というお話がありましたが、はっきりとその言葉は間違っている

と断言できます。指導者は「どうしたらできる」のかを分析しなければなりません。私が藤井寺で少年サッカーを指導していた時の話です。、サッカーボールが大きすぎて小学１年生や２年生では上手く飛ばすことができません。重たいボールを蹴ることが嫌になり、自分の順番がくるのが嫌そうでした。「またあの重たいボールを蹴らなくてはならない」と順番をまつ列へ歩いて移動してしまいます。でも、指導者がしっかりと走って勢いをつけて蹴らすことにより、ボールが飛んでいきます。そのボールがゴールに入ることで喜びを味わい、走って列に並び、次の自分の順番をわくわくしながら待つようになります。ですから、指導者は「なぜ、ボールを強くけらないんだ！」と指導するよりも、子どもが楽しみながらあのボールは重たくない軽いんだという意識に変えてやる指導が大切です。

（松井議長）

私の現役であった頃、トレーニングとして「ウサギ跳び」がありました。このトレーニングは、現在、個々の柔軟性にもよるようですが、膝関節やすねの骨に危険な負荷が加わると言われています。当時は負荷が強く極度の疲労感が伴うことから、効果的なトレーニングとして推奨されたのでしょう。しかし、このような根拠の伴わないトレーニング理論はむしろ「体罰」に遠くないですね。現在、スポーツ医学も進歩しており、医学的見地を根拠としてトレーニングへ結びつけることも、「平成時代のスポーツ」としてふさわしく感じております。団体や個人であっても、「スポーツかかりつけ医」を見つけておくことは、外傷予防などにもつながるのではないでしょうか。

（山田監督）

怪我をさせないためのリスク管理は大変重要です。また、オーバートレーニングなどによる故障は必ず避ける必要があります。「全羽曳野」の練習メニューについて「レギュラー練習をしない」ことで、野球関係者からよく質問を受けます。この方針は野球に精通した親からはジレンマがあるとは思います。しかし、同じメニューと同じ時間を子どもたちに与えることが、中学生の選手たちにとって重要であると考えています。スキルを向上させるための「レギュラー練習」に重点をおくより、まずは、中学生の体力（柔軟性・筋力・持久性・敏捷性・バランス）について考慮するべきだと考えています。また、体力も必要ですが、豊かな人間性を育むために、礼儀についても広く学ぶことが、10代の選手たちに求められています。野球の技術はグラウンドから離れてしまえば必要ないですが、「礼儀」はすべての環境で、一人ひとりの個人を印象づける「定規」になってしまします。選手たちがグラウンド以外でも親切にしてくれた人、あるいはお世話になった人へ、しっかりと本心から感謝などを伝えることができる人間になれるように願っています。コーチ陣とも育成について、いろいろ話し合っています。野球での目標である「全国制覇」を達成することよりも、重要な問題であると考えております。

（北川市長）

羽曳野市の人事状況については、団塊世代が退職で、多くの職員が定年を迎えております。また、一方では新しい職員を迎えています。その採用方法としては学力のみならず、面接等に今まで以上にウエイトをおいて採用させていただいております。素晴らしい人材を発掘するためにも、子どもたちの人間性をゆたかに育てる環境とはどういったものがふさわしいのか。行政、指導者や家庭などがどのような環境をつくっていけばいいのかを含めてお話を聞かせてください。

（山田監督）

子どもにわかりやすくチャンスを与えていくような政策を望んでいます。「チャンスを与える」とは勉強やスポーツ、あるいは美術や音楽などの秀でた子どもの能力に対し、政策として支援することでさらに伸びるような環境を整備いただくことです。わかりやすく言えば「行政として才能のある子どもたちをさらに伸ばしてあげる」と考えていただければいいのですが。野球やサッカーで素晴らしい技術を、美術ではゴッホやゴーギャンに負けない表現力などを、みがいてあげる事ができればと思っています。そのような支援は教育としては難しいと思います。施設などの計画なども環境づくりとして必要だと思いますが、このようなチャンスを与える支援制度も夢があり、おねがいしたいなと思います。昔は田舎に住んでいる、頭の良い子どもは田舎にずっと暮らさせない「書生制度」というものがありました。いろいろ才能の秀でた子どもをさらに伸ばしてあげることを考えた政策を積極的に考えていただければありがたいです。ぜひご検討いただきたい。

（ファルサ氏）

自分の子どもが野球を始めたときにすごくびっくりしたのが、ユニフォームやスポーツバッグをみんなで揃え、スポーツメーカーのグローブを持ち、グラウンドに行くと線が引いてあって、ネットが張ってあった。野球する環境は全て整ってあり、贅沢だなと思いなが

ら、また、チャンスを与えられているなとも感じました。イランで育った小学生のとき、サッカーの大会をすると、グラウンドがないので、広い道路を見つけて、学校の先生が捨てたチョークを集めておいて、線を引いて、ボールもなかったので一人ずつ少しのお金を集めてボールを買い、何度も修繕をして長い期間使用していました。また、そのボールは順番で家に持って帰り大事に管理していました。カップやトロフィーもみんなでお金を出し合って買いました。小学校のときはこのような取り組みに大人があまり介入しません。子どもたちは子どもたちで自分の面倒をみます。それから比較すれば、羽曳野の少年野球を見たときに「素晴らしいな、この環境であれば選手は伸びるな。」と思いました。日本の組織的なやり方に感心しました。ただ、親の協力が薄くなっていると実感しています。環境づくりということで施設は重要なポイントです。スポーツの強い国は施設などに力を入れています。スポーツ施設にも力を入れていただき、次にその施設で会議というかディスカッションを「指導者の指導に関する勉強会」などを行ない、ハード面だけではなく、ソフト面で力をいれればよいコンビネーションになり、人間性のゆたかな子どもが育つのではないでしょうか。

（河田会長）

もっとも危惧しているのは親が子どもの指導や躾を行うことが、なかなか家庭ではできていないような気がします。また、親が子どもを怒れない、怒っていない、そこが大きなポイントであると思います。私どもは市のグラウンドを使用させていただいてますが、年に何回かはグラウンドの整備をします。当然子どもも参加させます。参加させて石拾いや草むしりをしてもらいます。このようなことを大人だけでやってしまったら簡単です。子どもたちはグラウンドにきて「はい、試合をしてください。気をつけて帰ってください」という環境を与えられ、それが当たり前に感じてしまいます。あえてグラウンド整備をさせることで、自分たちがプレイする場所は自分たちできちっと整備するんだという気持ちを持たせることが必要です。そのような些細なことが、相手を思いやる気持ちなどに繋がっていくのだと考えています。選手も小学１年生から６年生までいますので全ての学年に同じように伝えることはなかなか難しいですね！親が子どもを怒れない、怒りすぎると虐待といわれるバランスが難しい時代です。褒めて育てるということは最近よく言われますが、褒めて・褒めて・褒めてばかりだと子どもは簡単に受け止めてしまいます。怒ることがあるから褒めることに効果が出るわけで、そのバランスを親はしっかり考えていく必要があります。行政と共に我々連盟指導者で何かできるようなことがあれば、協力していきたいなと思っております。

（松井議長）

この時代、行政が何でもやる、何でもできる時代ではありません。野球などに限らず、市民の方々も協働していただき汗をかいていただいた上、行政がどこまで協力し、歩み寄っていけるのかがポイントになってくるのではないでしょうか？昔のように行政が全てお膳立するのではなく、みんなで力をあわせ上手く「羽曳野らしさ」を生かすことを考えていくことが必要です。

（北川市長）

皆様はこれからも、野球を通して子どもたちの人間性を育む協力者として、あるいはスポーツ指導者としてご活躍いただくことを願っております。また、今回の対談でお話いただいた、ハード面と同時にソフト面を含め、行政としても、できる限り、精一杯、協力させていただかねばならないと実感いたしました。特にソフト面としては、少し行政としては至らない部分があるかと思います。今後、行政としましても、スポーツ団体や各種活動いただいてる方々との交流を深め、連携を図り、邁進してまいりたいと考えています。このようにダルビッシュ有投手がゴールデンスピリット賞を受賞され、野球のみならず、社会貢献の部分で大きく踏み出し、それを評価していただいたことは、これからスポーツなどに取り組む子どもたちの個々たる目標にもなります。また、子どもたちの特性をどのように生かすかについては、家庭や組織、行政でそれぞれで役割を意識し、一緒に話し合える機会をつくれればと思います。これからも、積極的にそういう面での子どもたちにとって良い環境をつくり、それを我々の次の世代へ良いタイミングでバトンタッチすることが必要と考えておりますので、ハード面ソフト面ともに充実させるように取り組んでまいります。今日は本当にありがとうございました。